

猫殺し

その他の短篇

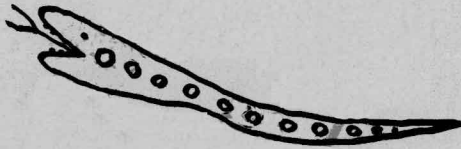
椎名誠



猫殺し

その他の短篇

椎名誠



猫殺し その他の短篇

一九九四年十月一日第一刷

*定価はカバーに表示してあります

著者 椎名 誠

発行者 堤 堯

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 東京(三二六五)一一二一

郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷
製本所 矢嶋製本

*万一落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取
替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

© MAKOTO SHIINA 1994
ISBN4-16-315080-3

Printed in Japan

目次

猫殺し 7

トロツコ海岸 33

デカメロン 57

ほこりまみれ 81

ポウの首 107

蛇の夢 121

椿の花が咲いていた。

143

殺人との接近

171

謎の解明

191

道の記憶

209

映写会

231

あとがき

258

装
幀

和
田

誠

猫殺し その他の短篇

猫殺し

日曜の正午近くにオボがやってきて、

「これから猫を殺しに行く」

と、いつものように五分刈の頭を片手でごしごし掻きながら言うのでぼくはあせり、布団の上からいくらかずり落ちそうになった。

ぼくは二階の屋根に干した敷布団の上に寝そべって山根赤鬼の漫画を読んでいたのだ。

山根赤鬼というのは面白い名前で、そんな名前の人が本当にいるのかとオボに聞いたことがあるけれど、オボはいろんなことをよく知っていて、それは商売用につけた名前だということがわかってすこし安心した。

オボは屋根の上のぼくによく聞こえるように大きな声で猫殺しのことをいうので、これは近所の人に聞こえたらまずいことだと思い、もっと声をひそめるように漫画本を置いて

必死になって合図したのだけれど、オボはそういうことを全然わろうとしないのだった。

中学二年のオボの声は数カ月前から急におじさんのように野太くなり、駄裏の青果市場で怒鳴っているおやつさんたちの声とあまり変らないくらいになっている。だからオボの言っていることはもう近所中に聞こえているのに違いなかった。

猫を殺す、というのは数日前からオボに聞いていたことで「世間のいろいろな事情を考へるともうそうするしか仕方のないことなのだ」と、オボはやっぱりおとつあんのような顔をしておとつあんのようなことを言った。

五分刈坊主のオボがいきなり「世間の事情」などというと、周りで聞いている者は一瞬わけもわからず呆然としてしまうくらいおかしく、ぼくと同じ小学六年の周作などは、野球帽の鑄くわを両手でへこへこ折りながら同じようにへこへこ笑ってしまうのだった。

オボのいう世間の事情というのは単純なことで、実際には「世間」ではなくて「オボの家のばあちゃん」の事情なのだった。

オボの家のばあちゃんは一年ぐらい前から話すことがちよっとおかしくなっていました。特に食べもののことが朝から夜まで気になっていて、文句ばかり言っている。一番騒ぐのはごはんの中に猫の毛が入っていて、それから味噌汁には猫の糞が混じっているというこ

とだった。

そんなものが混じっている訳はないよ、とオボの母ちゃんが何度も自分やオボのごはんを皿の上にわざわざひろげてみせるのだけれど、ばあちゃんはとりつくしまもなく、うまく隠してみせるのだからそんなものはぜんぜん信用できない、と言ってテーブルを叩いたりして暴れだすらしい。

それでオボの母ちゃんはまだ猫を捨てるしか方法がない、と思ってこれまで何度もオボにその猫を町のはずれの方へ捨てに行かせているのだが、猫はどんなに遠くに捨てにいつでも二日もするときちゃんと家に戻ってきてしまうのだ。

「だからもう殺すしかねえ。猫には可哀そうだけれど、ばあちゃんは人間で、人間の方が大事だからな、と父ちゃんが決心したんだ」

と、オボは数日前からそう言っていた。

屋根から降りていくと、道の横の草むらの中に古い布のポストンバッグが置いてあり、バッグは別にどこも動いてはいなかったけれど、そこにオボの家の猫が入っているということがすぐにわかった。

行くなら当然周作も連れていったほうがいい、と意見が一致して、袖無川そでなしがわの方向へは少

し回り道になるけれど、周作の家に寄り、今度はぼくが最初に周作を呼びに行つて、表に出てきたところで、重大作戦を打ちあけるようにして猫殺しの手伝いに来るように伝えたのだった。

周作の家はせんべい屋で、家の敷地にせんべいをつくる工場が立っている。工場といっても大釜用のへつついや手焼きせんべいを干す棚がごちゃごちゃと詰め込まれた納屋のようなところで、庭に行くといつも焼けた醤油のいい匂いがしてなんだか気持のあっちこちが嬉しくなった。

周作はいつものようにまわりが欠けたくずせんべいの入った袋を持っていくらか緊張した顔をして外に出てきた。

オボの家の猫はバググの中でずっと静かにしたままで、ぼくは周作の家へ来るまでの間あまり静かすぎるのが気になり、本当にそこに入っているのか何度か聞いてしまったくらいだった。

オボは「古猫なのでこんな中に入れられてしまうともう死ぬのがわかっていて、それでじっとしているのだ」と相変らずのおとつあんの声で言った。オボの家の猫は白と黄土色のまざった太った雄で、オボの家に住んではいるが家人にはあまりなつかず、いつも

悠々と近所を歩きまわったく好きなようにして生きているようだった。

「もともと拾ってきたのがばあちゃん、ばあちゃんにだけはすこしなついていただけれど、そのばあちゃんが呆けてしまつて、いまではこの猫が面倒のもとになつてしまつたんだ」

と、オボはその数日前猫殺しのことを話してきたとき説明していた。だからオボも自分の家の猫だけれどそいつとは、そんなに仲がいいわけではない。

「こないだ簞笥の上から飛びおりて母ちゃんの鏡台の鏡を割っちゃつた。鏡台の鏡のつぺんに飛び移るから鏡だけくると回つて踏み台に當つて割れちゃつたんだ。鏡台は母ちゃんの嫁入り道具だつたつてから母ちゃんも怒つたよ」

「ばあちゃんは猫を殺しにいくのを知つてゐるのかあ」

「知つてゐるよ。ばあちゃんがどこかへ捨ててこい、といつも怒鳴つていたんだもの……」恨みや祟りがあつてはいやだから袖無川近くの鮫垂神社にお参りしていくことにした。

川沿いなのでそのあたりは湿地帯になつていて、夏も終りだというのに神社に向う板敷きの道の周りは藪蚊が沢山いた。

「お参りするとかえつて氣持わりい。そのまま川に行つた方がよかつたのに」

あまり手入れのされていない神座の前で周作がかなりの不服顔でそう言った。言いながら半ズボンの下の足をこしゃこしゃとせわしなく動かした。藪蚊がたえずうるさく飛び回っていた。

オボが前から言っていたからついてきたのだけれど、ぼくも猫を殺しに行くというのはあまり嬉しいことではなかった。

神社から川までは湿地帯を渡っていく橋とも道ともいえない半ば腐った板敷きの木道があった、そこは昨年までやっていた袖無川拡幅工事のための作業員通路であった。木道のところどころにはなにかば使い捨てのような状態で、泥と雑草に埋まった起重機やブルドーザーの残骸が転がっていて、そこは当然ながら工事関係者以外立入禁止となっていたが、いまではその立札さえ朽ちて倒れどこかへ埋もれてしまっていた。

「やだな気持がわるい。死人花がいっぱいだよ」

木道を先に立って歩いていた周作が振りかえり、どういう気持で喋っていいかわからないときにもいつもするへこへこ笑いの顔をした。木道の左右に真昼の松明のよう（たいまつ）にまんじゅしゃげの花が沢山咲いていた。木道までくると風が抜けるのもう藪蚊の唸り声はあまり聞こえず、かわりに赤トンボが頭の上をまったくの無音で何匹もわらわら踊っていた。そ